花筐　はなかたみ

初版発行　昭和四四年一一月二〇日

著者との話合いにより検印省略
定価六五〇円

著者© 檀一雄
発行者 高橋直良
発行所 冬樹社
東京都千代田区神田神保町二ノ一八
振替口座七七五七　郵便番号一〇一
電話　東京（二六四）〇三四六代表

印刷 広研印刷株式会社
製本 一重製本株式会社

花筐（はなかたみ）

檀一雄短編集

冬樹社

美しき友に献ず

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

序　詩

花はありあり俺の思念のなかで散るが
この旅情はいつも俺の魚眼のそとにある
俺がそなたを見忘るるその瞬時
そなたを念ずるこの不思議

花散るやうづもるる淵にわれもゐて

花筐＝もくじ

此家の性格……9
退屈な危惧……39
美しき魂の告白……61
衰運……97
帰心……123
花筐序……151
花筐……163
夕張胡亭塾景観……211
あとがき……265

装幀　吉田　臣

此家の性格

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

薄暗くなると一緒に、母は朱塗の鏡台の前でケバケバと化粧をした。楽屋をちょいと覗いて、いつもあの花道の上の特等席に陣を取ると、母は朝日をふっとふかしたりして僕はおびえるように脇にかしこまるのだった。金一封、檜様より竹の丈に差下さる——長くこう叫ばれると嫌な気がしてまともに母の顔が見られなかった。はねると楽屋裏に廻ったり、又時には竹の丈が僕の家のお茶によばれたりするようになった。其頃から僕は竹の丈をオジさんと呼び習わされて、一座が引上げる時には隣り町迄母と見送りに行ったりした。

竹の丈の一座は冬毎に来るようだった。村中噂が立って僕は竹の丈の生ッ白い顔を見るといつもにがにがしい思いがした。丁度、其年もこの一座が旧正月を当てようというので家の

餅搗きにはこの男も加勢に来た。永い不行跡の後で行衛を失うていた父が北海道からひょいと戻って来たのは其日だった。変なはしゃぎようをしていた母も、ひどく吃ってたすきと尻っぱしょりをおろしては不安そうにパタパタ玄関に立っていった。僕はおこわを噛みながらおびえていたが、竹の丈はそれっきりだった。きつい吃りで物のよう云えなかった母は、それ以来殊更口をきかなくなり、酒を飲む父を座敷に置いた儘一人でシンと米をとぐのだった。父は何も噂を知らず日益に威猛高になって一家は父の下におびえるようだった。

其頃から家計は傾いて行った。崖続きの櫟山一町歩が長く床に就いていた祖父の死後間もなく売られて行った。豚飼えばひどうもうかるという話を母が聞きこんで来て父の心を唆るようだったが父は口をひんまげた儘動かなかった。それで又、村境にもっていた三四段の島畠も見放さねばならなくなった。

竹藪がざわめいて変に心細い毎日だった。父は相変らず絽の羽織を着込んではよりのある毎に顔を出しきっとひとかどの意見を吐いて来るようだった。羽虫の入った廊下を父のミシリミシリという跫音が過ぎて行って、母屋に寝っている僕はいつもそっと首をちぢめた。親達のそういうねじれた雰囲気の中で、僕は卑屈に育っていった。

何時の頃か架設された鉄道が白いブリッジの上をゴウゴウ駆けるとこんなものに乗ったことがなかったせいか、無性に恐しかった。空が染まって、とんぼを追うてはあの丘の辺迄来

ると、胆をつぶすように物凄い音を立てて汽車が走り過ぎたりした。僕はヒイヒイ云って泣いて帰った。父はそんな時黙って見返すばかりで泣いた理由がこわくてよう云えなんだ。

それでも機嫌の良い日で父が珍らしく僕に相撲をせぬかと云うこともあった。僕は父の筋骨の硬い足にしがみつき荒い脛毛に食いついて息の切れる迄押しかかったがピシャリと投げつけられる許りだった。熱して火のつくような気持で挑んでゆくと父は僕の膝をはらって青畳の上に嫌という程投げとばした。母が側で負けてやれと云うと却って父は僕の足をはらい脛一杯がすり切れて、ただわめくように泣くばかりだった。うらめしい気持が去らず、僕はそれ以来恐ろしくて父に手向えなかった。

僕はいつも父の目を逃れるように生きていた。母屋が広くて夜は殊に暗かった。この不味い生活の周囲に五位鷺が裂くように叫けぶ。その脅迫するような啼き声の断続するのが判っきりと僕の脳裡に刻まれるのだった。

布団を深くかぶっておびえながらホッと寝入る。そんな夜も又無慈悲に五六度厠に立たせられた。うずくような夢の中にふと小便を催して来、どうにも耐えられなくなっては走り出し、ああ良かったと庭の厠に心地よくジャーッとひっかけたと思うと、それが布団の中でもう背から腰にかけてジュクジュクしめって来るのだ。大きい幻滅のなかで狂気のように悲しかった。音のせぬようにそっと寝巻で拭ったり、尻を当てて温めて見たりしたが、それは朝

迄乾かなかった。母が起しに来ても起きれなかった。又かと父は布団を一杯に剝ぎ、身に浸む寒さの中で裸の儘僕は布団の上にすくむのだった。父は僕のエリカミを掴むと円くにじむ小便の上に鼻頭をこすりつけ、むれた小便のにおいは終日頭を去らなかった。

冬が深く寝小便は毎夜だった。飲物が禁じられ目をぬすんで汲桶に頭をつっこんで水を飲む間も父の又水又水という声が其処ら一杯鳴る気がした。然ししまったと思うひと時前の寝小便はとろかす程心地良いものだ。籬にひっかけた夢を見るかと思うと、今日は裏の葱に、橋の上から澄んだ小川の中に。

こんな事があった。豆腐屋の源というのが僕に怪我をさせてあやまりに来、母がそれをなだめている時、父は歯ぎしりしたと思うと僕の止めるのもようきかず、いきなりなぐりつけるのだった。其夜烈しく戸を叩たく音がして母が母屋の戸を開けると酔った源の親父が旦那を呼んでくんなと父を誘い出し、三郎を使いに遣ったが父は用事があるとて帰って来なかった。翌朝不図目覚めて見ると父は母の襟首をもって床に据えつけているようだった。母の裾がまくれついぞ見たことのない白いふくらはぎが覗き、この売女奴がと酔いほうけた父の声も顫えていた。僕は尻にしめってくる寝小便の上でじっと唾を飲んだ儘動けなかった。

息づまるような空気が家の底に流れて僕は誰にも物が云えなかった。昼膳を立てて三郎が

父のはなれに持ってゆくと、急に父の激怒した声が聞えてきて母屋に仁王立になり母の髪を摑んでは引き廻した。母の袖がもぎれて泣き出す母の頬を、父はピシピシなぐりつけた。父の筋骨が顫えて、はては乳房を引っぱり出し母の着物を尻迄まくりあげてエイエイ折檻するようだった。仄暗い部屋の中で母の太股が残酷にふるえ、母はいぎたない叫び声をあげては逃げ廻った。こわいながらもこの両親の醜い争いは僕に不思議な興奮を湧かすのだった。

不意に父はタルキに吊ってある曾祖父の槍を外ずして母の腹に据えた。帯がとけて母の浴衣が腕迄ずれ、父はそれを槍でつっかけると母を素裸にしてしまった。母は狂気のように庭に飛び下りた。父は槍を畳にたてて、一俊良く見ておけと云って其儘はなれにひいた。涙のせきが一気に落ち僕はワッと母に抱きついた。母の皮膚がヒリヒリ痙攣して母はもう黙っていた。

終日父は酒をあおり、母は鏡台のある二畳に引いていたが、仄暗くなると母屋の下の土間に出て、一心に薪を割るふうだった。ふと鉈がそれ、鮮かな血がにじんだと思うと、母の顔には何かきつい決意めいたものが浮ぶのだった。僕は縁の上でそれが怖しくてよう見られなかった。僕は烈しく三郎を呼び、三郎は僕を肩車にのせて檜垣の家の外をぐるぐる廻るのだった。

母が自殺したのはそれから数日と経たなかった。山番が駆けつけ、僕が三郎の肩車にのっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com